

## 新入生の学校環境への適応に関する研究

学校では、いじめや不登校など様々な問題が生じている。その中でも、特に小学校1年生、中学校1年生、高等学校1年生は環境の変化などから子どもたちが学校に適応できない状況が多い。

本研究では、このような小1プロブレム、中1ギャップ、高校1年生の様々な不適応に対し、どのような対応及び支援が必要であるのかを、小学校4校・中学校2校・高等学校2校において新入学児童生徒にグループ・アプローチ等の実践を行ったり、学校間連携を行ったりすることで検証し、その有効性を確かめた。

<検索用キーワード> 学校不適応 小1プロブレム 中1ギャップ 高校1年生の不適応  
グループ・アプローチ 学校間連携 学校適応度調査

### 研究会委員

豊明市立豊明小学校教諭	石見 雅典(平成20年度)
豊明市立豊明小学校教諭	鈴木 義昭(平成21,22年度)
豊明市立舘小学校教諭(現同校教頭)	岸 洋行(平成20年度)
豊明市立舘小学校教諭	近藤 雅彦(平成21,22年度)
東郷町立東郷小学校教諭	宮道 弘巳(平成20,21,22年度)
東郷町立兵庫小学校教諭(現豊明市立中央小学校教頭)	下出 修史(平成20年度)
東郷町立兵庫小学校教諭	水野 和幸(平成21,22年度)
豊明市立栄中学校教諭	近藤 雅彦(平成20年度)
豊明市立栄中学校教諭	澤田 好弘(平成21,22年度)
東郷町立諸輪中学校教諭(現東郷町立東郷中学校教頭)	大澤 孝明(平成20年度)
東郷町立諸輪中学校教諭	早川 佳秀(平成21,22年度)
県立豊明高等学校教諭	長谷川光広(平成20,22年度)
県立豊明高等学校教諭(現県立東郷高等学校教頭)	近藤 雅(平成21年度)
県立成章高等学校教諭	荻野 堅資(平成20年度)
県立成章高等学校教諭(現県立豊橋南高等学校教諭)	石田 桂子(平成21年度)
県立成章高等学校教諭	内藤ひでみ(平成22年度)
総合教育センター教育相談研究室長(現県立岡崎高等高校教頭)	村上 慎一(平成20年度)
総合教育センター教科研究室長(現県立東海南高等学校教頭)	都築 数雄(平成20年度)
総合教育センター教育相談研究室長	荻野 堅資(平成21,22年度)
総合教育センター研究指導主事(現高浜市立高浜小学校教諭)	加藤 応子(平成20,21年度主務者)
総合教育センター研究指導主事(現刈谷市立小垣江東幼稚園園長)	沼田留美子(平成20,21年度)
総合教育センター研究指導主事	坪井 佳代(平成20年度)
総合教育センター研究指導主事	丸崎 恵子(平成20,21,22年度)
総合教育センター研究指導主事	坂田 貴仙(平成21,22年度)
総合教育センター研究指導主事	山本 由紀(平成22年度)
総合教育センター研究指導主事	佐藤 淑乃(平成22年度)
総合教育センター研究指導主事	岡村 直樹(平成20,21年度 22年度主務者)

## 1 はじめに

学校では、いじめ・不登校など様々な問題が生じている。中でも、特に小学校1年生・中学校1年生・高等学校1年生は、環境の変化などから、子どもたちが学校に適応できない状況が多いと考えられる。

小学校1年生では、入学時に小学校生活や集団生活にうまく適応できず、授業が成立しにくい状況が生まれる、いわゆる小1プロブレムが問題になっている。22年度の愛知県教育委員会の調査でも「授業中に勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外へ出て行ったりすることが度々あった」「担任の指示どおりに行動しないことが度々あった」という児童の姿が、4月に32.4%の学校で見られた。また、小学校1年生の不登校数を調べると、不登校数の割合は全国で0.09%(1058人に一人の割合)であるのに対して、愛知県では0.18%(552人に一人の割合)であり、愛知県は全国平均より多くの児童が不登校になっていることが分かる。(図2)(平成21年度調査)

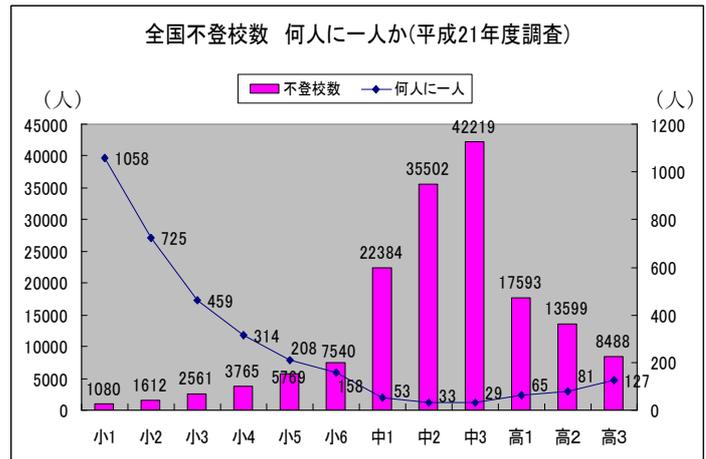
さらに、「授業中に立ち歩きをする」「友達とうまくかかわることができない」といった問題行動も多くなっている現状である。

中学校1年生では、小学校から中学校への大きな環境の変化により、自己有用感を喪失(学習・部活動についていけない、親しい友人・教員等の支えがなくなる、周囲の仲間から認めてもらえない、新しい人間関係がつかれない、自己理想と現実の自分の違いに悩む)し、中1ギャップが生じると言われている。

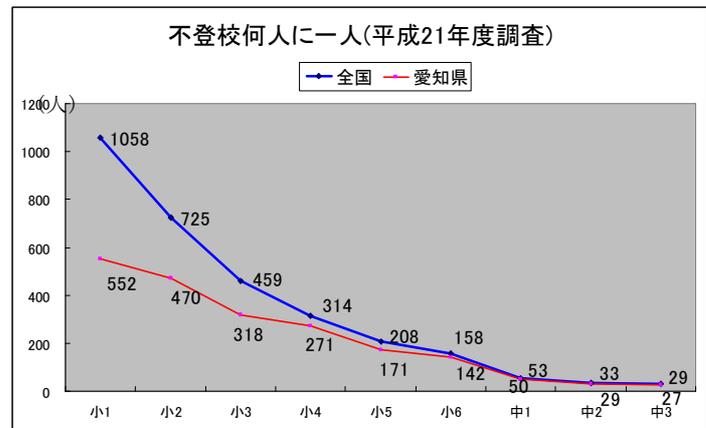
また、図1の学年別不登校数を見ると、小学校6年生から中学校1年生の増え方が著しく大きくなっていることが分かる。図2からは、愛知県でも同じ傾向が見られることが分かる。さらに、中学校2、3年の不登校数が更に増えていることを考えると、一度不登校になると、登校できるようになることが難しいことがわかる。

さらに、図3の学年別のいじめ件数を見ると、中学校1年生で急に多くなり、件数もピークになっている。このことから、新しい環境に慣れずに、人間関係づくりがうま

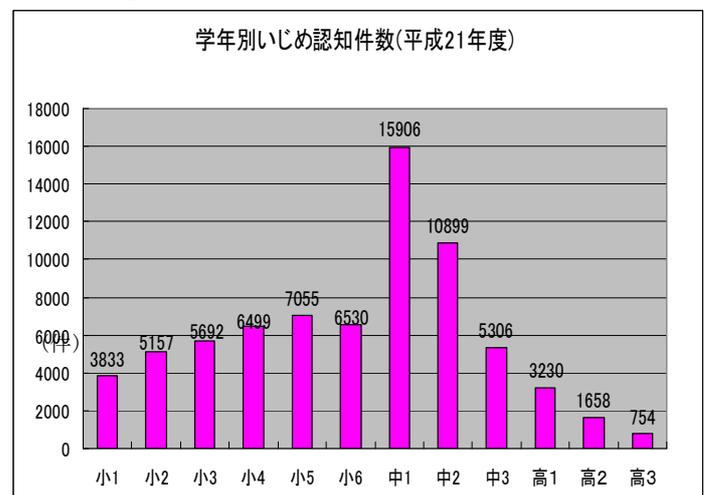
【図1 不登校数】



【図2 不登校数の割合 愛知県と全国との比較】



【図3 学年別いじめ件数】



くできていない様子が分かる。

高等学校1年生では、新しい集団、新しい教科・科目などの変化に興味・関心をもち、新たな決意や目標をもちやすい時期であるとともに、生徒同士や生徒と教師の新たな人間関係づくりや未知の事柄への不安を抱く時期でもある。その中で、新しい学習環境や人間関係につまずいて、学校生活への不適応を起こすことも少なくない。

図4からは、高等学校1年生の42人に一人が高等学校を中途退学しているということが分かる。この数からも、高等学校に入学しても学校環境に適応できずに不登校になったり、学校を退学したりする生徒が多いという現状が分かる。

現代の児童生徒の様々な不適応行動や問題行動をなくすためには、入学直後から各学校の実態にあった対応をすることが求められる。小学校学習指導要領解説には「入学当初から徐々に大きな集団における幅広い人間関係の中で活動できるようにし、集団で活動することの楽しさを味わわせたり、友達の大切さを実感させたりする。徐々に児童が学校での生活に慣れるようにして、学校生活を楽しく送ることができるようにする」と書かれている。また、高等学校学習指導要領解説には「高等学校入学当初においては、個々の生徒が学校生活に適応するとともに、希望と目標をもって生活できるように工夫すること。人間関係を形成する力を養う活動などを充実するように工夫すること」と書かれている。

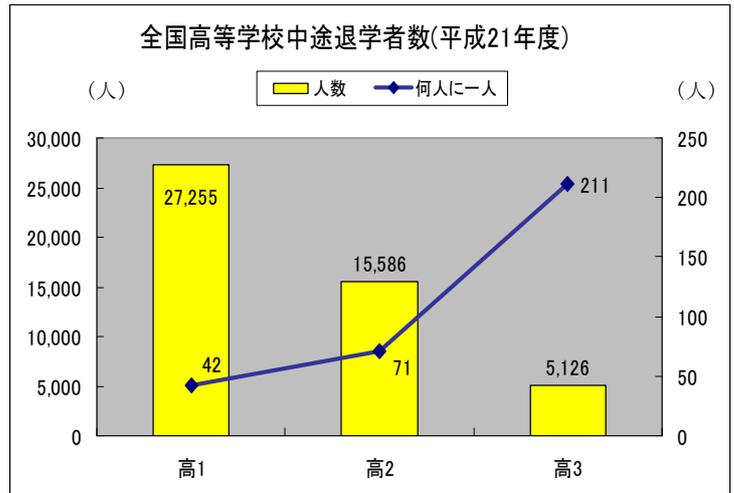
このように、新入児童生徒一人一人が、入学当初に学級で受け入れられているという所属感や仲間意識が高まれば、早期によりよい人間関係が構築され、不適応行動や問題行動の予防、改善、解消に役立ち、新しい学校環境へ適応できると考えられる。そこで、新入生の所属感や人間関係づくりを促すためにグループ・アプローチを通して各学校はもとより学校間で連携し、その有効性を検証していく。

今回は、小・中・高等学校の実態に応じたグループ・アプローチの効果的な実施内容や実施時期について、より研究を深めていきたいと考える。

## 2 研究の経緯

従来の生徒指導・教育相談では、問題解決的なアプローチの傾向が強く、一つ一つの問題に対応してきた。これに対し、不適応行動や問題行動が起こってから対処するのではなく、問題が起こる前に手段を講じた方がより効果的ではないかという考えのもと、当センターでは、不適応行動を「予防」し、児童生徒が自らの手で未来を「開発」する力を育成するために、予防・開発的教育相談という考え方を重要視し、平成12年度から予防・開発的教育相談を効果的に行うための研究に取り組んできた。そして、他者と触れ合うことで学びを得ることができるグループ・アプローチに着目し、第Ⅰ期「予防・開発的教育相談の在り方に関する研究」（平成12年度～14年度）、第Ⅱ期「予防・開発的教育相談の推進に関する研究」（平成15年度～16年度）、第Ⅲ期「心の発達への支援に関する研究」（平成17年度

【図4 高等学校中途退学者数】



～19年度)に続く第Ⅳ期の研究として、平成20年度から取り組んできた。第Ⅳ期の研究では、第Ⅲ期までの研究の成果を踏まえつつ、全国的に認められる現象である小1プロブレム、中1ギャップ、高1の様々な不適応について、予防開発的な教育相談の見地から、グループ・アプローチの実践を中心に調査・研究を行い、支援の方法を探った。それぞれの支援の実践とその成果について報告したい。

#### 第Ⅰ期「予防・開発的教育相談の在り方に関する研究 ー構成的グループ・エンカウンターを中心にしてー」

学級活動、部活動、保護者会、教科の授業など、様々な場面での実践を行った。この結果、集団内の結び付きが強くなり、帰属意識が高まるなどの効果が確認された。一方、教育活動への定着に対して、①時間確保の工夫 ②年間計画に基づいた計画的な取組 ③構成的グループ・エンカウンター以外のグループ・アプローチ活用についての研究など三つの課題が明らかになった。

#### 第Ⅱ期「予防・開発的教育相談の推進に関する研究 ー行事に生かすグループ・アプローチを中心としてー」

実践時間の確保を考慮し、学校行事を核とした年間計画を立てて実践すると効果が大きいことが明確になった。また、児童生徒の「心の絆づくり」への効果とともに、中学生や高校生には構成的グループ・エンカウンター以外のグループワーク・トレーニングやラボラトリー体験学習の方が抵抗なく取り組めることも分かった。

#### 第Ⅲ期「心の発達の支援に関する研究」

児童生徒のそれぞれの発達段階に即したグループ・アプローチの有効な活用が、心の発達を支援し、社会性の獲得に向けて、効果的であることが分かった。

#### 第Ⅳ期「新入生の学校環境への適応に関する研究」(本研究)

第Ⅲ期までの研究で、児童生徒の実態に応じたグループ・アプローチを選択して実施することが児童生徒の健全な心の発達を促すために非常に重要であることを確認できた。

第Ⅳ期での研究は、小1プロブレム、中1ギャップ、高1の様々な不適応に対して、入学直後から人間関係づくりを促すグループ・アプローチに焦点をあてて実践を進めることにした。また、きめ細かな支援や各校種間の連携も進め、どのような対応及び支援が必要であるかを検証し、有効な支援の在り方を探究していくことにした。

### 3 研究の目的

豊かな人間関係を築き、学校環境に適応することができる個や集団への支援の在り方を検証する。

### 4 研究の仮説と手だて

#### 仮説

各学校の実態に応じ、新入生児童生徒に人間関係づくりを促すグループ・アプローチを実施すれば、新しい集団の中で人間関係を築いていく力をはぐくむとともに、不適応行動や問題行動を未然に予防し、学校環境への適応を支援することができるであろう。

手だて

小学校、中学校、高等学校の1年生の全クラスで、児童生徒の実態に応じたグループ・アプローチを実践する。実施時期については、新入生が入学した早い時期から、学校行事等を考慮して計画的に数回実践する。

学校の状況に応じて校種間で連携を図りながら、新入生の学校環境への適応を図っていく。

## 5 研究の方法

入学直後とグループ・アプローチの実践を重ねた後に行う適応度調査と、実践中に新入生の変化の観察を随時行い、その効果を測定する。

また、小学校や中学校での不安を進学する学校に伝え、入学前の不安がどのように変化したのかを調べるなど、学校間連携の在り方についても調査する。

### (1) 適応度調査について

各協力校代表委員の計画に基づき、グループ・アプローチを実践し、それぞれの児童生徒の校種に応じた評価尺度（研究協力校代表委員作成による適応度調査）を用いて、その効果を測定する。

#### ●適応度調査の内容

小学校；1～4は「心の健康と生活習慣に関する調査」（文部科学省 平成15年3月）より抜粋して作成，5，6については小学校の研究協力員で作成

#### 【質問内容】

- 1 わたしは ひとりぼっちで さみしい。
- 2 わたしは みんなと なかよく できる。
- 3 がっこうは たのしい。
- 4 わたしは ともだちを たたく。
- 5 せんせいと おはなし するのが すき。
- 6 だいすきな じゅぎょうがある。

中学校、高等学校；心理測定尺度集IV「対人関係・適応」より抜粋

#### 【質問内容】

##### 「学校への反発感傾向因子」

- 1 学校の先生に対して親しみを感じる。
- 2 この学校に対して親しみを感じる
- 3 この学校の生徒であることを誇りに思う。

##### 「友人関係における孤立感傾向因子」

- 4 親しい友達がいる。
- 5 友達と一緒にいると楽しい。
- 6 勉強以外のことを友達とよく話す。
- 7 友達とできるだけ交わるようにしている。

##### 「登校嫌悪感傾向因子」

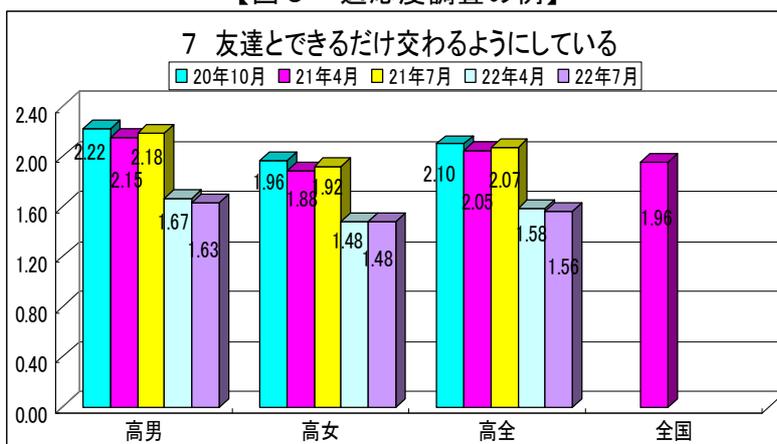
- 8 学校を休みたいという気持ちになる。
- 9 私にとって学校はいごちが悪い。

## 【適応度調査の見方】

それぞれの質問ごとに〔1 当てはまる 2 やや当てはまる 3 どちらともいえない 4 あまり当てはまらない 5 当てはまらない〕

で答え、その平均値をとる。つまり、数値が低い方が適応度が高くなっていると言える。5本のグラフは、一番左がグループ・アプローチをしていない平成20年の10月のグラフ。2本目3本目は平成21年度の比較、4本目5本目は今年度の比較になる。なお、「登校嫌悪感傾向因子」についてはアンケート結果を回答選択肢の番号を逆にすることで、低数値の方が適応度が高くなっている(図5)。

【図5 適応度調査の例】



## (2) 入学時の期待・不安及びグループ・アプローチを体験したあとの感想

中学校及び高等学校においては、本研究3年次に入学時の期待・不安を調べた。また、グループ・アプローチを実践した後に再度、期待・不安がどのように変化したのかについても調査した。さらに、グループ・アプローチを体験した後の気持ちについても調査した。

## 6 研究の内容

### (1) グループ・アプローチの実践

各校種ごとに、グループ・アプローチを実践し、どのような効果があるのか検証する。具体的なグループ・アプローチの内容については各学校ごとに児童・生徒の実態を考えながら実践していく。なお、実践する主なグループ・アプローチについては、以下のとおりである。

- 小学校1年生……幼稚園・保育園での遊びを取り入れた学年担任合同作成によるエクササイズ  
構成的グループ・エンカウンター
- 中学校1年生……グループワーク・トレーニング  
構成的グループ・エンカウンター  
ラボラトリー体験学習
- 高等学校1年生……グループワーク・トレーニング  
ラボラトリー体験学習

### (2) 幼稚園・小学校・中学校・高等学校の連携

新しい学校環境に飛び込む児童生徒たちにとって、環境の変化による不安は強く感じられるものであり、スムーズに対応できずに不適応行動や問題行動を起こすこともある。そのため、不登校等の兆候を早期に発見し、対処するだけでなく、小学校・中学校・高等学校間の緊密な連携体制の確立を基盤とした上での、人間関係づくりの能力の育成が必要と考える。

したがって、新入生の学校環境適応への促進には各校種間による連携は必要である。学校環境への適応に生かす方策を探るために、各校種間の連携の実態を調査する。

今回は、二つの小学校の一部の児童がある一つの中学校へ、また、一つの中学校からある一つの高

等学校へ進学する生徒がいるので、その児童生徒について追跡調査をする。その他、幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校の連携について調査する。

【実践と実践テーマ】

No.	実践のテーマと内容	
1 A 小 学 校	テーマ	－児童の実態に即したエクササイズの改良実践を通して－
	内容	1年生が学校環境に適應するために、固定エクササイズや新しいエクササイズを工夫改良し取り組んだ実践。児童の実態や関心意欲を考えながら、学級担任とよりよいかかわり方を考えながら人間関係づくりを目指した。
	主な G A	・あいさつじゃんけん ・ぞうさんのさんぽ ・進化じゃんけん ・じゃんけん列車 ・おみくじトーキング ・〇×ゲーム ・サイコロトーキング ・ドッジビー ・かえるジャンプ ・集合ゲーム ・鬼ごっこ(増え鬼, 手つなぎ鬼) 等
2 B 小 学 校	テーマ	－幼保小連携による児童の実態を生かした実践を通して－
	内容	伝統校で素直な児童が多い中、幼保小の連絡会で「環境に馴染むのに時間がかかる, こだわりが強い, 初めてのことが苦手」などの入学児童の実態を把握したうえで、グループ・アプローチを行った。
	主な G A	・あくしゅだいさくせん ・あくしゅであいさつ ・集合ゲーム ・ジャンケン列車 ・進化ジャンケン ・ジャンボジャンケン ・三色鬼ごっこ ・こおり鬼 等
3 C 小 学 校	テーマ	－異学年交流や幼保小連携を生かした実践を通して－
	内容	学級単位または学年単位で人間関係を深めるためのグループ・アプローチを実践した。その際、特別支援学級の児童との交流も深めた。また、1年生と6年生とのペア活動を通して学校に早く適應できる取組を行った。幼稚園・保育園との連携では、入学前の園児との交流会を行い、子どもたちの適應に関して調査した。
	主な G A	・「1, 2, 3」 ・出会いのあいさつ ・じゃんけんお巡りさん ・猛獣狩り ・あくしゅであいさつ ・先生とビンゴ ・じゃんけんぽ, けんけんぽ ・カードめくり ・じゃんけん汽車 ・フルーツバスケット ・いすとりゲーム 等
4 D 小 学 校	テーマ	－グループ・アプローチと異学年交流活動を生かした取組－
	内容	1年生がスムーズに学校生活に適應できるように、グループ・アプローチと異学年交流活動を生かした実践を行った。グループ・アプローチでは、幼稚園・保育園との情報交換や交流会を生かし、児童会では、異学年交流活動のペア学年で6年生との活動を通して人間関係づくりの向上を図った。
	主な G A	・あかいくつゲーム ・じゃんけんれっしゃ ・なかまあつめ ・イエス・ノーゲーム ・握手ではいろろ ・好きな4つのコーナーに集まろうゲーム ・握手でバイバイ ・笛の合図でなかまをつくろう ・ひらがなからどうぶつをつくろう 等

5 E 中 学 校	テーマ	—小中連携による生徒の実態を生かした実践を通して—
	内容	小学校の時にもっていた友人に関する不安を中学校の教師に知ってもらうことで、不適応を未然に防ぐことができると考え、入学当初にグループ・アプローチを実践しながら生徒同士の人間関係づくりを目指した。
	主な G A	・匠の里 ・謎のマラソンランナー ・ばらばら紙芝居を完成させよう
6 F 中 学 校	テーマ	—校区の生徒の実態を把握した実践を通して—
	内容	中学校に進学する2校の小学校の生徒数に差があるということから、小学校ごとの子どもたちの学校適応に注目した実践。特に、少人数の小学校から来た生徒の期待度や不安度に注目しながら実践を行った。
	主な G A	・文章完成法 ・班対抗クイズ法 ・ジェスチャーゲーム ・匠の里
7 G 高 等 学 校	テーマ	—グループ・アプローチと校種間連携を通して—
	内容	生徒の居住地区が広範囲にわたる状況で、入学時のオリエンテーションとして人間関係づくりを深めるため、グループ・アプローチを実践した。また、中学校との校種間連携では、入学時の期待や不安をつかんだうえで、学級や学校になじめるような支援を行った。
	主な G A	・宇宙船での選択 ・匠の里
8 H 高 等 学 校	テーマ	—キャリア教育の一環としての実践を通して—
	内容	グループ・アプローチを利用して、人間関係における高1生徒の問題を解消するだけにとどまらず、「生きる力」の一つとして、豊かな人間関係を構築する力を育成したいというキャリア教育も目指した実践を行った。
	主な G A	・匠の里 ・サバイバル ・好きなプロスポーツは

G A = グループ・アプローチ

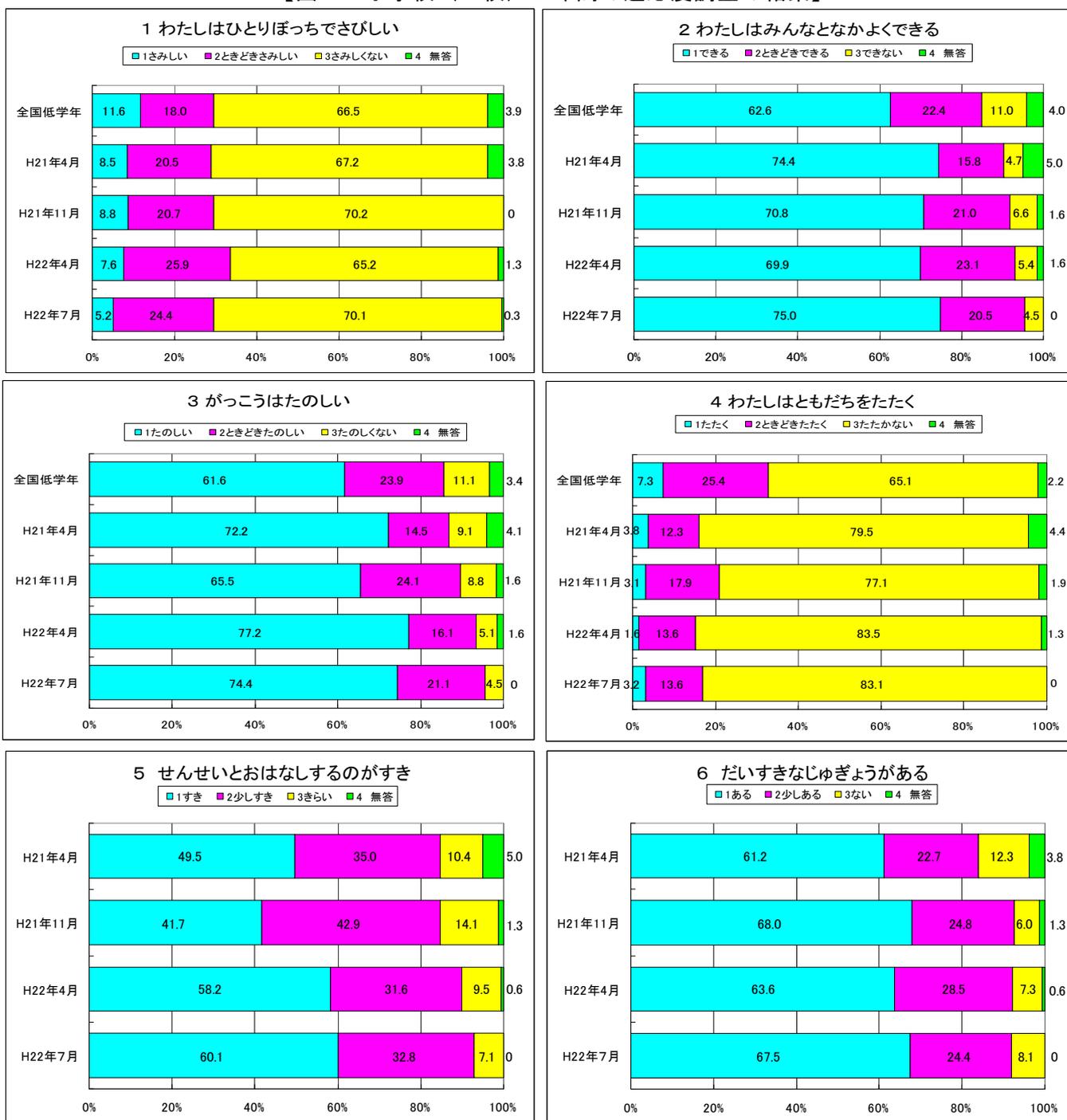
## 7 研究のまとめ

本研究では、小学校、中学校、高等学校の新入生を対象として「各学校の実態に応じ、新入生児童生徒に人間関係づくりを促すグループ・アプローチを実施すれば、新しい集団の中で人間関係を築いていく力をはぐくむとともに、不適応行動や問題行動を未然に予防し、学校環境への適応を支援することができるであろう」という仮説を検証することを目的として実践研究を行った。この目的に対し、各学校で児童生徒の学校への適応にふさわしいグループ・アプローチを実践し、児童生徒の変容を学校ごとの方法で調査した。また、学校状況に応じて、校種間の連携も深めながら適応度を調べた。

ここでは、各校種ごとに研究を振り返り、その成果と課題について整理したい。

### (1) 小学校について

【図6 小学校（4校）2年間の適応度調査の結果】



まず、図6の適応度調査について考えてみたい。「1わたしはひとりぼっちでさみしい」という項目について昨年度は大きな変化はなかった。今年度については、4月の段階で「さみしい」「ときどきさみしい」と答える児童が多かったが、7月にはかなり減少したことが分かる。また、「2わたしはみんなとなかよくできる」「3がっこうはたのしい」という項目については、毎年、肯定的に答える児童がグループ・アプローチを実践した後に多くなり、適応度が高まったと考えられる。

一方、「4わたしはともだちをたたく」については、毎年4月に比べると割合が増えている。また、図7は、愛知県が小学校1年生の実態調査を行ったものである。各項目で、時期がたつにつれて問題行動は減っている状況だが、唯一「③児童同士のけんかやトラブルが日常的に起きていた」については、4月よりも5月が増加している。

このことから、入学したばかりの児童は、友達が少ない状態で、けんかなどのトラブルは少ないが、友達が増えるにつれて、良くも悪くもかわることが多くなり、けんかやトラブルが増えてくるのではないかと考えられる。友達の輪が広がる時に、よいかかわりができるようにしていくことが大切であると感じた。

「5せんせいとおはなしするのがすき」と「6だいすきなじゅぎょうがある」については、年によって差はあるが全体的に向上している。小学校の適応度調査の結果からは、友達や学校に対する気持ちについては適応してきているということが分かるが、一方で友達づくりの過程で、けんかとかトラブルが発生しやすい現状があるので注意深く見守っていく必要性が分かった。

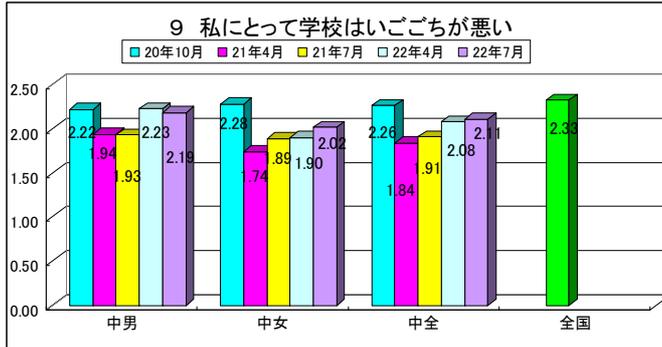
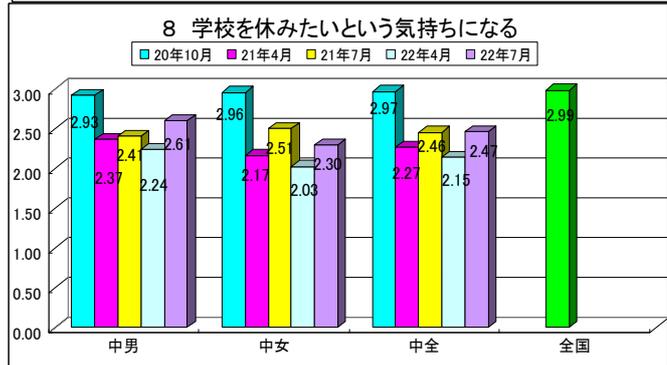
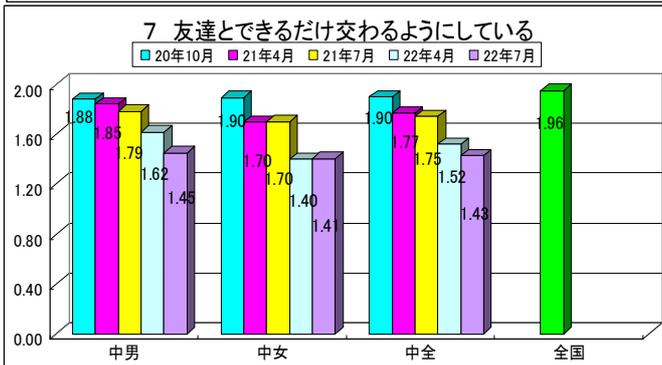
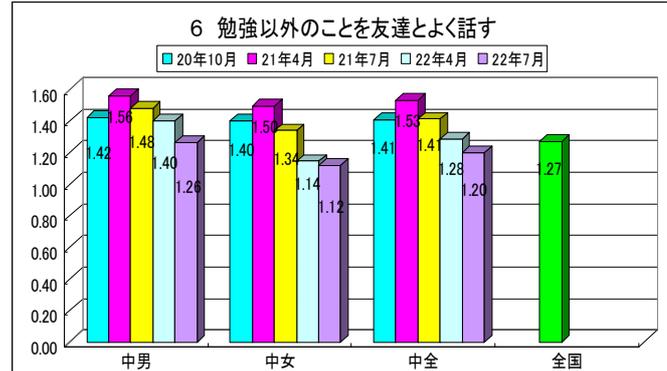
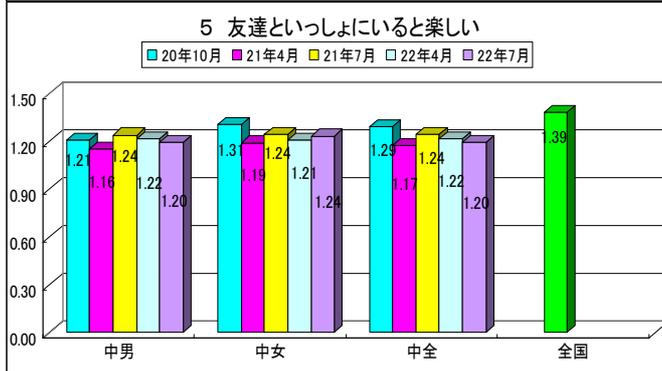
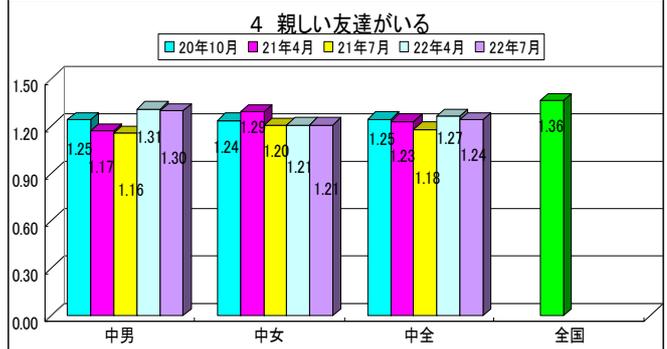
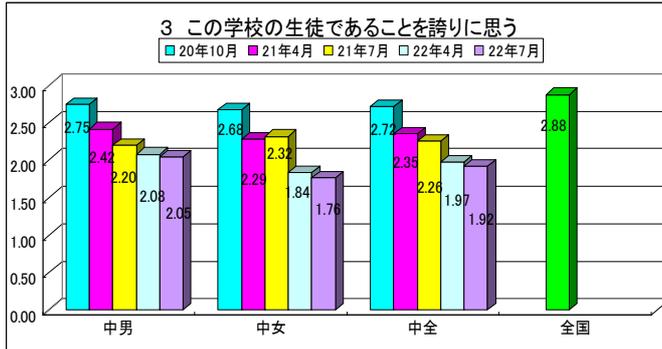
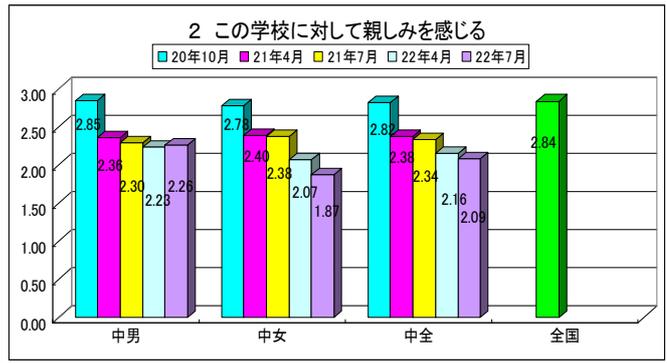
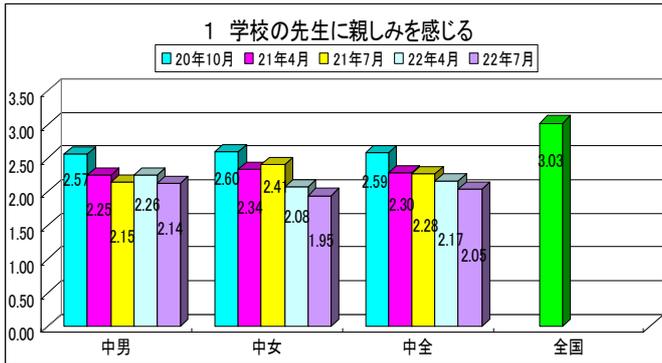
次に、幼稚園や保育園との連携について考えてみたい。全ての小学校が幼稚園や保育園と連携を図りながらの取組であった。園児が小学校の運動会に参加したり、幼稚園、保育園の先生と小学校教諭が情報交換を行ったりという活動は、多くの学校で既に行われていることであるが、もう少し子どもたちがスムーズに学校に慣れるための取組を入れた。具体的には、幼稚園や保育園で行われている遊びやエクササイズを事前に教えてもらい、それを、小学校でのグループ・アプローチの実践に生かしていった。その中でも、児童の実態に合わせて1年生の担任がエクササイズを改良して、子どもたちがより楽しく取り組める方法を模索した。それにより、今回の実践で、担任の意識が変わり、一人一人の子どもを、今まで以上に詳しく観察し、学校により適応できるような意識付けができたことは事実である。また、小学校教諭が保育園での学び方や遊び方を体験し、保育士による子どもへの対応や指導の仕方を学び、小学校での児童への対応や指導の参考にすることができ、幼稚園や保育園と小学校で協力しながら育てていくという体制が整ってきた。

今回の実践では、全ての項目で学校への適応が高まったとは言えなかったが、幼稚園や保育園と小学校との連携が深まったことや、担任が、今までは見過ごしそうな児童の行動に対しても注意深く見守り、学校への適応が図られたことは、大きな成果があったと考える。

【図7 小学校1年生の実態調査 平成22年度】

【質問事項】1年生の1学期(4,5,6,7月)に、次のような児童の姿がありましたか				
①授業中勝手に教室の中を立ち歩いたり、教室の外へ出て行ったりすることが度々あった。				
②担任の指示通りに行動しないことが度々あった				
③児童同士のけんかやトラブルが日常的に起きていた。				
④教育的な配慮や支援を要する児童に教諭が個別対応している間に、他の児童が勝手なことをしていることが度々あった。				
⑤私語が止まず、ザワザワしていることが度々あった。				
	4月	5月	6月	7月
①	32.4%	28.2%	21.6%	17.3%
②	32.4%	29.5%	23.3%	20.4%
③	20.7%	21.6%	17.7%	14.7%
④	20.1%	16.2%	12.0%	9.5%
⑤	7.8%	6.3%	3.9%	3.5%

(2) 中学校について 【図8 中学校（2校）3年間の適応度調査の結果】



8, 9の調査については6ページにも示してあるように、回答選択肢の番号を逆にしてあるので、低数値の方が適応度が高くなっている。

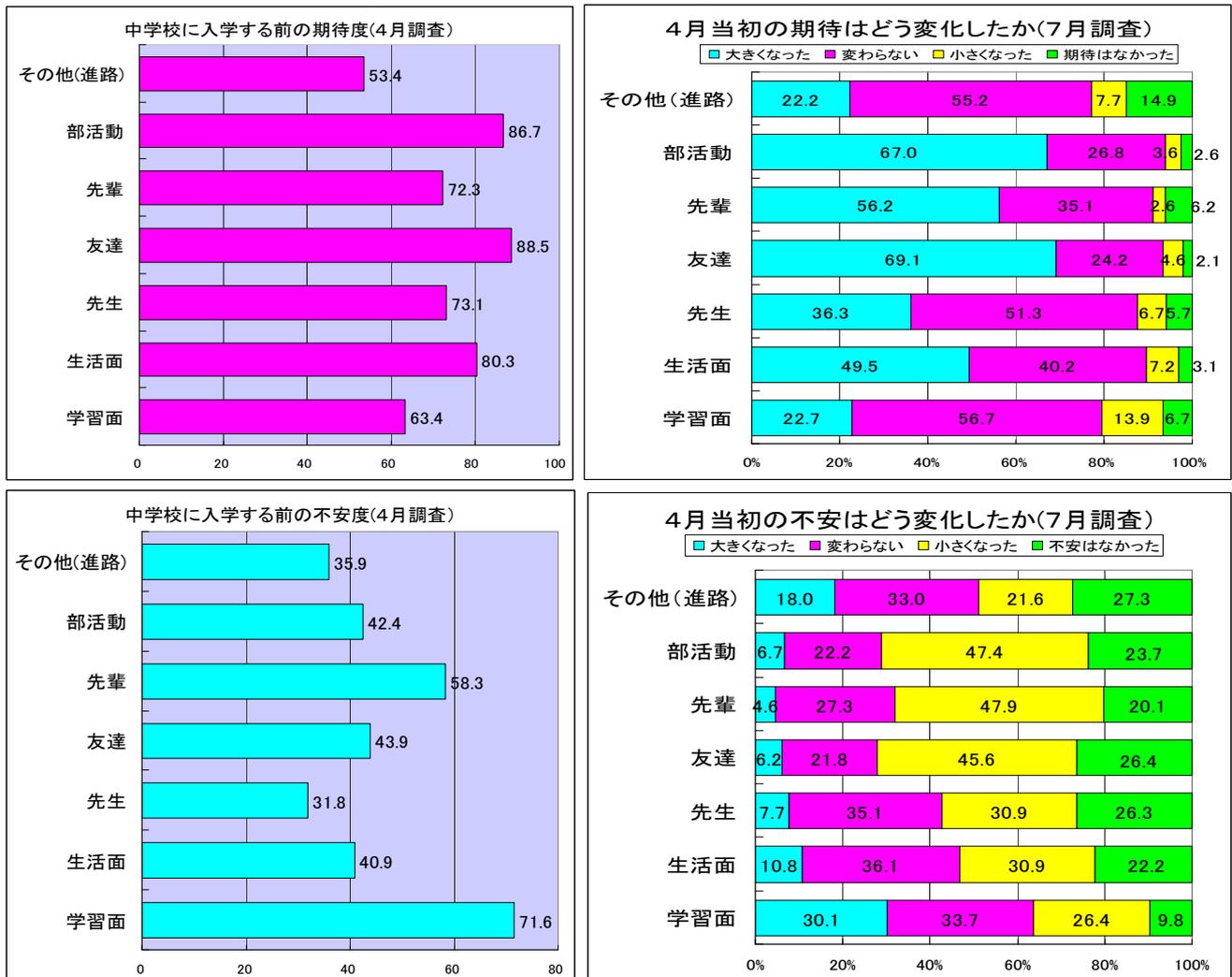
(適応度調査について)

まず、図8の適応度調査について考える。「学校への反発感傾向因子」については「1学校の先生に親しみを感じる」「2この学校に対して親しみを感じる」「3この学校の生徒であることを誇りに思う」の3項目について、どの項目もグループ・アプローチをする当初より値が低くなり適応度が高まっていると考えられる。また、「友人関係における孤立感傾向因子」では「4親しい友達がいる」「5友達と一緒にいると楽しい」「6勉強以外のことを友達とよく話す」「7友達とできるだけ交わるようにしている」の4項目についても、適応度が高まっている。これは、中学校に入学してのから様々な不安が少なくなり、さらに友達も増えていく中で学校に対する適応が高まったのではないかと考えられる。

これらを支える要因として、早くからグループ・アプローチを行い友人関係を深めていくことは大切だと考えられる。

一方「登校嫌悪感傾向因子」では、「8学校を休みたい気持ちになる」「9わたしにとって学校はいごちが悪い」の両項目とも適応度が高まっているとは言いがたい。特に「学校を休みたい気持ちになる」については、昨年度、今年度と休みたいと思っている割合がかなり増えている。これは、友人関係の適応度が高まって、学校を休みたくなる気持ちにはそれほど影響しないということが考えられる。小学校時代よりも登校時間が早くなったり、学校での拘束時間が増えたりということが影響している可能性もある。

【図9 中学校入学への期待・不安】



(期待度不安度について)

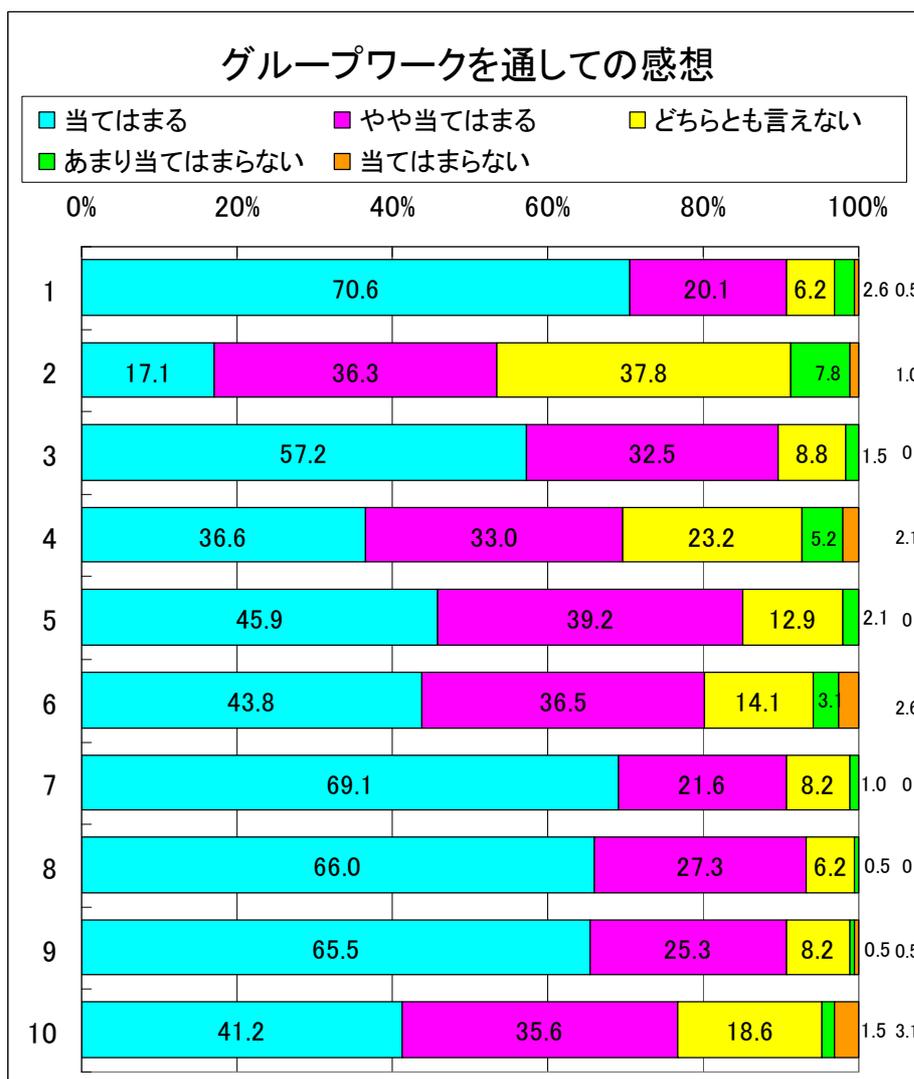
図9は、中学校入学時に入学する前の生徒の期待、不安について調べたものと、その後の変化を7月に調査したものである。中学校に入学する前の期待度が大きかったものは「部活動」「友達」「生活面」であった。それに対して、7月の調査では、期待がさらに大きくなったものは、「友達」「部活動」「先輩」の項目である。これらのことから、中学校に入学したばかりの生徒は、友達づくりと部活動に大きな期待をもって生活していることが分かる。

次に、入学する前の不安度が大きかったものは、「学習面」「先輩」「友達」などであった。それに対して、7月の調査では、不安が小さくなったものは、「先輩」「部活動」「友達」の項目である。部活動や先輩については、入部してから練習を重ねていくうちに、部活動の内容そのものや先輩に対する不安が減っていったものと考えられる。ただ、わずかではあるが、不安が大きくなったと答えている生徒もいるので、それらの生徒を注意深く見守っていく必要があると考えられる。

センター発表における協議の中で、少人数の小学校から入学する生徒が、多人数の小学校から入学する生徒に比べ中学校入学前の不安度が大きかったが、グループ・アプローチを行う中で人間関係をつくり、不安が小さくなったことが分かった。このことから、特に少人数で入学し友達づくりに不安を抱えている生徒にとって、グループ・アプローチによる人間関係づくりが有効であることが言える。

【図10 グループ・アプローチを通しての感想】

1	みんなでやると楽しかった
2	自分のよさや、自分のことについて分かってきた。
3	友達のよさや、友達のことについて分かってきた。
4	自分の気持ちが分かってくれよかった。
5	友達の気持ちを、思いやるようになってきた。
6	自分の意見が、言えるようになってきた。
7	協力することや、団結することが大切だと分かった。
8	お互いの意見を、ちゃんと聞き合うことが大切だと分かった。
9	みんなと仲良くできるようになったと思う。
10	クラスのふんいきがよくなったと思う。



### (グループ・アプローチ後の感想)

グループ・アプローチ後の感想では「みんなと仲良くできるようになったと思う」「お互いの意見を、ちゃんと聞き合うことが大切だと分かった」「協力することや、団結することが大切だと分かった」「友達のよさや、友達のことについて分かってきた」「みんなですると楽しかった」の5項目については90%以上が肯定的な感想であった(図10)。このことから、グループ・アプローチが人間関係づくりに役立っていることが分かる。しかし、「自分のよさや、自分のことについて分かってきた」という項目では、半分程度の生徒しか肯定的な感想をもっていない。今後グループ・アプローチを重ねていくことで、自己肯定感を高めていく必要性を感じる。

### (校種間連携)

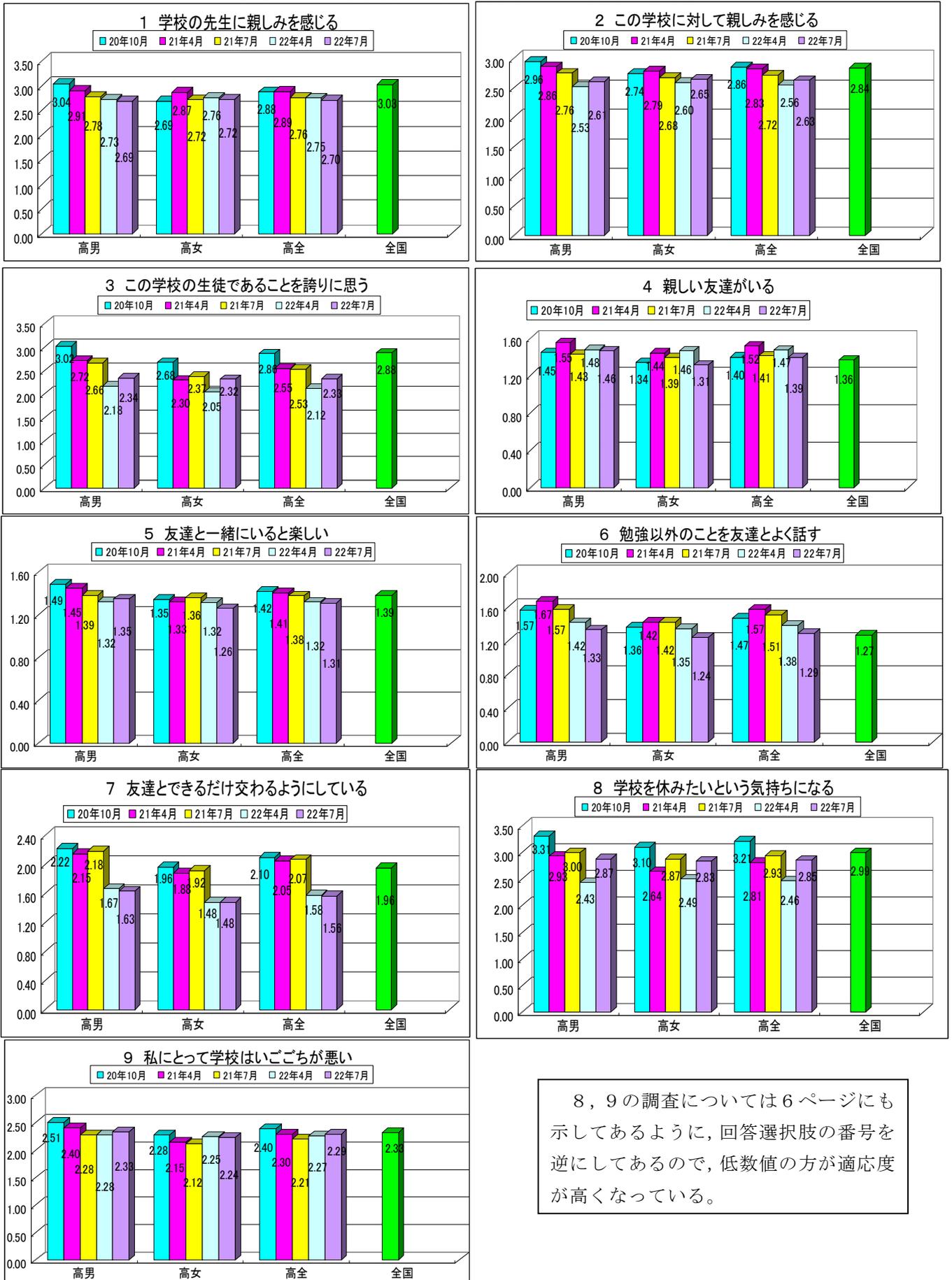
今回中学校に入学する前の小学校6年児童に「中学校生活で不安に思うこと」という内容でアンケートをとり、それを中学校に送ることで、中学校で不安を少なくしようという取組を行った。中学校の発表内容にもあるように、①入学当初の状況、②小学校6年生の時にもっていた不安、③現在の様子、④変化のきっかけの4項目について調べた(実践5-6～5-8参照)。その結果、多くの子が不適應を起こすことなく中学校生活に慣れていったことが分かる。変化のきっかけの要因としては、人前で話すこと、自分のよい発言が、グループ内やクラスの中に認められたことが挙げられ、グループワークトレーニングを通して、みんなと協力し、助け合うことの大切さが分かったと答えている生徒もいる。

このように中学校に入学するときに、不安をもった生徒をあらかじめつかんでおけば、特に注意深くその生徒の様子を観察し把握して、小さな変化にも気付くことができると思う。このような取組により、中学校への不適應が少なくなり、中1ギャップも減少していくものと考えられる。

さらに、学校間連携の一環として、中学校の体育大会に小学生を参加させたり、小学校の段階で部活動を見学させたりして、中学校に対する不安を少しでも取り除くという取組が、様々な中学校で実践されていくことが重要であろう。

(3) 高等学校について

【図 11 高等学校(2校)3年間の適応度調査結果】



8, 9の調査については6ページにも示してあるように、回答選択肢の番号を逆にしてあるので、低数値の方が適応度が高くなっている。

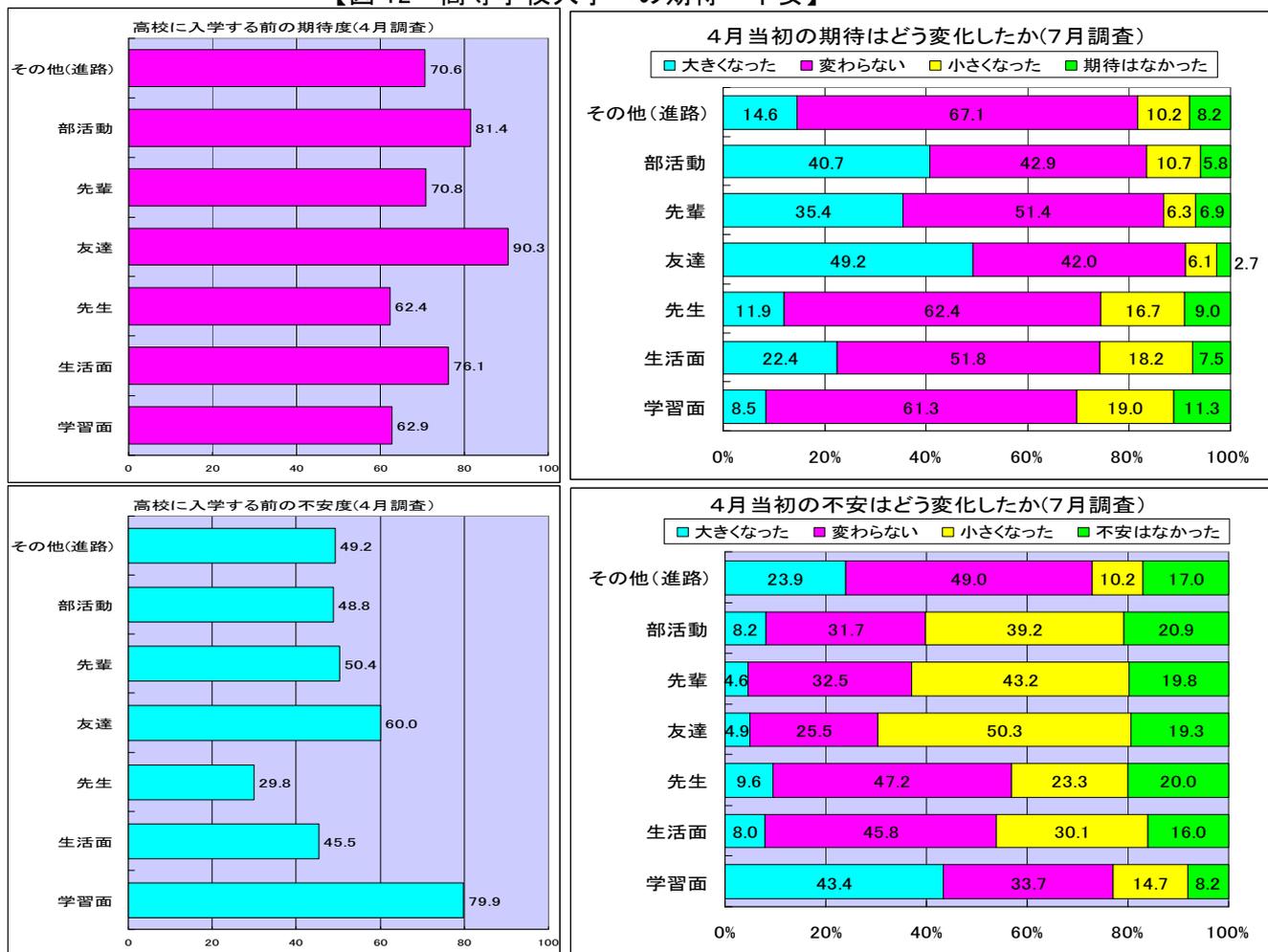
(適応度調査について)

まず、図 11 の適応度調査について考える。「学校への反発感傾向因子」については「1 学校の先生に親しみを感じる」「2 この学校に対して親しみを感じる」「3 この学校の生徒であることを誇りに思う」の3項目については、年度によって数値が高くなったり、低下したりしており、グループ・アプローチと適応の相関関係はなかった。高等学校については、自分で進路を選び入学したので、4月には学校に対する期待がかなり大きいですが、日数を重ねていくうちに、学習や進路に関する不安が増してきているものと考えられる。

「友人関係における孤立感傾向因子」では「4 親しい友達がいる」「5 友達と一緒にいると楽しい」「6 勉強以外のことを友達とよく話す」「7 友達とできるだけ交わるようにしている」の4項目についていずれも、数値が低くなっている。これは、高等学校に入学してから早めにグループ・アプローチを行い友人関係を広げていったことで、特に友人に関する不安が小さくなり、学校に対する適応が高まったものと考えられる。

一方「登校嫌悪感傾向因子」では、「8 学校を休みたい気持ちになる」「9 私にとって学校はいごちが悪い」の両項目については適応度が高まっている状態とは言えない。特に「学校を休みたい気持ちになる」については、中学校と同様に前年度、今年度と休みたいと思っている割合がかなり増えている。学校への登校の気持ちは、友人関係だけでなく様々な要因で変化するものではないかと考えられる。

【図 12 高等学校入学への期待・不安】

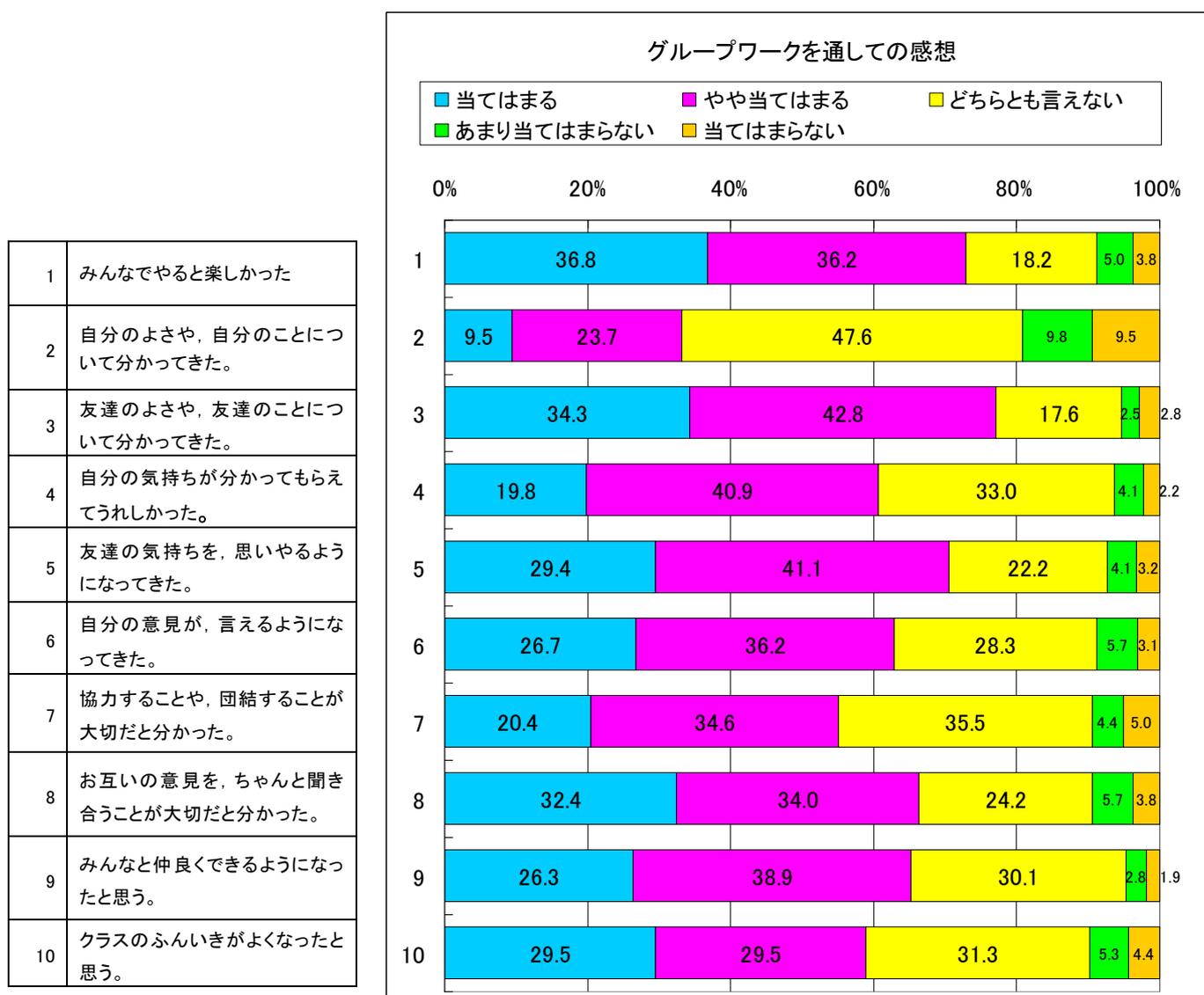


(期待度不安度について)

図 12 は、生徒の入学する前の生徒の期待、不安について調べたものである。高等学校に入学する前の期待度が大きかったものは「友達」「部活動」であった。そして、グループ・アプローチを体験した後に、期待がさらに大きくなったものも、「友達」「部活動」である。これらのことから、高等学校に入学したばかりの生徒は、友達づくりと部活動に大きな期待をもって生活していきながら、さらにその期待が大きくなっていることが分かる。

次に、入学する前の不安度が大きかったものは、「学習面」「友達」などであった。これに対して、7月の調査では、友達については不安が小さくなったと答えるものが多く、友人関係づくりを進めていく中で学校に適応していく様子が見えてくるが、学習面については不安が大きくなったと答える生徒が小さくなったと答える生徒の3倍近くおり、友人関係が構築できても学習に対する不安は大きくなっている状況が分かる。

【図 13 グループ・アプローチを通しての感想】



### (グループ・アプローチ後の感想)

図13のグループ・アプローチ後の感想では「友達のよさや、友達のことについて分かってきた」「みんなでやると楽しかった」「友達の気持ちを、思いやるようになってきた」の3項目については70%以上が肯定的な意見であった。また、「自分のよさや、自分のことについて分かってきた」という項目以外では半数以上の生徒が肯定的な意見をもっている。このことから、グループ・アプローチが人間関係づくり、その中でも特に友達とのかかわりをつくっていく上で効果的であることが言える。しかし、「自分のよさや、自分のことについて分かってきた」については、30%程度しか肯定的な意見をもっていない。これは中学校でも同じような傾向だったが、グループ・アプローチを重ねて自己開示等をしていく中で、自己肯定感を高めていく必要性を感じる。

### (校種間連携)

中学校から高等学校への校種間連携として、E中学校の卒業生の中でG高校に進学した生徒について21年度と22年度に不安や期待がどうなったのか追跡調査を行った。G高校の発表内容にもあるように、「期待していることや楽しみにしていること」「不安に思っていること」について中学校で調べたものを高等学校に送り、指導の資料とした。

この資料を参考にすることにより、生徒の不適応を早めに知ることができ不適応を防ぐことができるのではないかと考える。生徒の変化を見守っていくためには、観察と記録が重要となる。今回の取組で、今まで学校へ適応するのが難しかった生徒について早期発見、早期対応することで学校に適応できるようになったり、先生方にとっても特に注意深く見なければならぬ生徒がはっきり分かたりするなど効果が大きいと考える。中学校から高等学校へ進学するには、多くの学校に生徒が進学するため、中学校からの連絡が高等学校にどれだけ伝わるのか難しい面もあるが、できる限り情報交換を行っていくことが大切だと考える。

## 8 おわりに

今回の研究では、小学校1年生・中学校1年生・高等学校1年生の学校環境への適応について調べてきた。それぞれの入学時にグループ・アプローチを行えば、「友人関係における孤立感傾向因子」が減少し、学校に適応することが分かった。しかし、学校への適応が増せば、学校に行きたい気持ちが増すという結果には結びつかなかった。

各学校の実践の結果から、グループ・アプローチを実践していくこと、そして同時に幼稚園・保育園と小学校、小学校と中学校、中学校と高等学校の学校間での連携を深めていくことの大切さが分かった。小学校に進学する段階では、園児が幼稚園や保育園でどのような遊びをして育ったのか、園児の特性はどうかをきちんと連絡し、幼保小の先生方で一緒に育てていくという気持ちが必要だと考える。また、中学校や高等学校に進学する際には、一人一人の児童生徒がもっている不安を事前につかみ、新入学時に担任が不安を把握しながら指導していくことが、学校に不適応を起こす生徒を減少させることにつながるということが分かった。このように、グループ・アプローチと学校間連携を深めながら、児童生徒の健やかな成長を見守っていきたいと考える。そして、今後の教育活動において、この研究が児童生徒の学校への適応を促す効果的な実践を生み出すために役立つことを願ってやまない。

## 参考文献

図1～図4(文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より)

『心の健康と生活習慣に関する研究』文部科学省(2003)

(小学校2年生で調査, 平成11年度から3年間)

『心理測定尺度集Ⅳ』(サイエンス社 2007)

(中学生1年～3年で調査, 高等学校でも実施可能, 平成12年度)

『中1ギャップ解消に向けて』新潟県教育委員会(2007)

『Creative School』(プレスタム社 2003)

『協力すれば何かが変わる』〈続・学校グループワーク・トレーニング〉(遊戯社 1994)

『エンカウンターで学級が変わる 小学校編』(図書文化 2003)

『エンカウンターで学級が変わる 中学校編』(図書文化 2003)

『構成的グループエンカウンター事典』(図書文化 2004)